

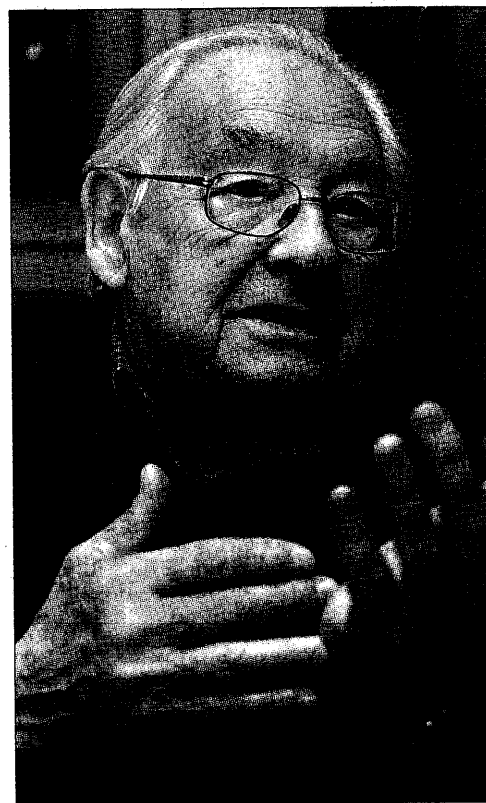
キーワード

■ソ連崩壊 1991年12月25日、最後の大統領ゴルバチョフ氏が辞任し、国家としてのソビエト連邦が解体され消滅した事件。22年に世界最初の共産主義国家として誕生し、米国と並ぶ超大国として君臨した体制が幕を閉じた。その後はロシアのエリツィン大統領（当時）が主導する独立国家共同体（C I S）がこれに取って代わった。

■ワルシャワ蜂起 1944年8月、ナチスドイツ占領下のポーランドで地下組織「国内軍（AK）」が起こした武装蜂起。独立行政組織の樹立をめざしたが、頼みとしていたソ連軍はヴィスワ川で進軍を停止。ドイツ軍の徹底攻撃で



10月に蜂起軍が降伏するまでに20万人以上の兵士、市民が死亡した。ワイダ監督の「地下水道」では蜂起軍の女性兵士が下水の迷路をさまよったあげくヴィスワ川に注ぐ出口に到達するが、鉄格子がはまって出られない。絶望する兵士の視線の先の向こう岸にはソ連軍が待機していることはポーランドの観衆だけが即座に理解できた＝写真は蜂起から60周年の2004年8月1日、ワルシャワの記念碑を訪れ頭を下げるドイツのシュレーダー首相（当時）、ロイター。



映画監督 アンジェイ・ワイダ氏

1926年、ポーランド東部スヴァウキ生まれ。15歳でナチス抵抗運動に参加。戦後、南部クラクフの美術大学で絵画を、中部ウッチの映画大学で演出を学ぶ。「世代」（54年）でデビュー。「鉄の男」（81年）がカンヌ映画祭で最高賞パルムドールを受賞。87年の京都賞の受賞賞金でクラクフに日本美術技術センターを創設した。89年、ポーランド上院議員に当選し91年まで1期務めた。2000年に米アカ

インタビューを終えて

普段は過去の作品を見ないが、デジタル化に伴い代表作「灰とダイヤモンド」を約50年ぶりに目にしたという。主演のズビグニェフ・ツィブルスキについて「彼ほど力強い生を演じられる役者に出会うことはなかった」と振り返る。

ポーランドがたどった非運の歴史が投影されている。作品では同国出身のシヨパンが祖国のために作曲した

受け継がれる反骨精神

「軍隊ポロネーズ」が印象的に使われた。ワイタ氏はポーランドが何度も国土を分割され、地

わらず、独自の文化を保ち続けて再生したと強調する。冷戦時代、同国が東欧民主化の先頭に立ち、ソ連支配に風穴を開ける役割を果たした背景には、数奇な運命に翻弄（ほんろう）された人々が受け継いだ反骨の遺伝子があった。

祖国を振り続けた監督が欧州の一員としての未来に希望を託し、ナシヨナリズムの台頭に警鐘を鳴らしたことが印象に残る。

80歳を越す現在も映画作りの最前線に立つ。最も好きな自作について尋ねると「これから撮る作品だよ。まだテーマも決めていないが」と目を細めた。（ワルシャワで、岐部秀光）

■連帯 ポーランドの独立自主管理労働組合。共産体制下の1980年、西部グダニスクでレフ・ワレサ氏を議長として結成され、ポーランド民主化運動の中心的な役割を担った。当時のヤルゼルスキ政権が一時、非合法化するなど対立を続けたが、89年の自由選挙で勝利。ソ連圏で初めて非共産党政権を担った一写真は1980年8月8日、グダニスクの造船所でストライキ中の労働者を前に演説するワレサ氏、ロイター。



■EUの東方拡大 2004年5月、当時15カ国で構成していたEUに10カ国が新規加盟した。旧ソ連のバルト3国（エストニア、ラトビア、リトアニア）のほかチェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキア、スロベニアなどほとんどが旧共産圏の国で、東西冷戦の終焉（しゅうえん）とEUの規模拡大を印象づけた。

〈もっと知りたい人は〉

第2次大戦下、ソ連軍の捕虜となったポーランド兵が虐殺された事件を題材としたワイタ監督の最新作「カティンの森」が12月、日本で公開される。「アンジェイ・ワイタ自作を語る」（ヴァンダ・ヴェルテンシュタイン編）は監督自身による代表作の解説をインタビューなどでまとめたもの。「ポーランドの歴史」（イェジ・ルコフスキ、フベルト・ザヴァツキ著）は地図上から何度も消えた同国の歴史をわかりやすく解説している。